

Café milk hall 最後の日 そして... 忘れ得ぬ夜

7月4日午後6時までに、37年間のミルクホールの営業を終えるため、私達は37年分の営業の後片付けと、50年分の生活の後始末に日夜追われていました。事務所の移転、仮住まいへの引越し、工事の手配に、店の食器からピアノに至るまでの保管場所への移動計画と、済ませなければならない仕事は山積みで、この調子じゃ7月4日を迎えるなんて到底無理だと思えるほどでした。しかも6時にはパーティが始まってしまう...思い悩んでいるところへマスターの従兄で、一族の長老である磯見昭太郎氏の訃報。雪ノ下カトリック教会でのお通夜は、7月4日午後6時から...というものでした。なんとという巡り合わせでしょうか。当日、店は朝から観光のお客さまと、閉店パーティの為に駆けつけた友人達、そして裏ではごった返したスタッフ達。なんとかお通夜へも行き、帰って急いで喪服を着替え、訪問客を迎える事が出来たのでした。懐かしい顔、顔、思い出話は明け方までつきませんでした。そして翌日からすぐに工事業者が入り、準備を始めました。スタッフたちは前日朝から夜中まで働いていましたが、休む間もなく店の最後の片付けを始めます。そして長老の葬儀と、なんとか乗り切りました。刻々と片付けに追われる中、交差するように工事業者は解体にかかっています。そして翌々日の夕方、二人の訪問客がありました。琵琶と尺八とジャズのライブの演奏の二人でした。7月7日の夕方に店で最後に飲もうという約束をしていたのを、すっかり忘れていたのです。店にはもう何もなくて、山積みになった椅子やテーブルがあるばかり。閉店パーティの残りの酒を、ライフラインも切れつつある中、コップ酒でということに...店とマスターと、何十年も不思議な縁を持った二人と、ジャズの事、お店の事、人との不思議な繋がりや、なんやかやと語り合っていました。酔いも回り、夜もふけた頃、一人が尺八を取り出し、初めに歌い、そして、すっかりあばら家となった店の隅々まで尺八を吹きながら歩き回り始めました。それは、装いを剥がされ、あらわになり、疲れきったミルクホールを、慰め、浄めてくれるものでした。その時、二人がわざわざこの日に来てくれたことの意味を知りました。そして4人は、何もなくなったバールームに、くるま座となり、真夜中まで飲み、滅茶苦茶に歌っていました。

琵琶法師は、ただ静かに座っていましたが、「4人だけじゃない、もっと沢山来て...」と、呟きました。そう、たぶん...あの夜、目には見えない、思い出深い人達が、ミルクホールに、お別れに来ていたのです。翌日、バールームのカウンターは無くなりました。ただ、忘れ得ぬ夜の、あの清らかな音色だけが、今も耳に残っています。



ミルクホールタイムス総集編

¥1500



COLUMN

鎌倉の猫事情

第九十七話



4月の終わりに、グーニーが死んでから、ミルクホールはしばらく悲しみに包まれていました。なにしろそういう場合、良かったことばかりが思い出されるものです。本当にいい子だったね、とか、頭も良かったし、お行儀も良かった、なんて皆で褒めちぎってしまっただけ。私の悲しみは自分の予想をはるかに上回るものだったので、皆もとても気にしてくれました。確かにグーニーはいい子でしたが、その頃の私は常軌を逸するほどの妄想に取り付かれて、グーニーは、伊勢神宮の神様のお使いだったとか...、そういえば、孫悟空にもちょっと似てたから、天の神様にいたずらを叱られて、人間界に少しの間落とされていたんだとか、ようするにかぐや姫？のようなもので、天に帰る日が来て泣く泣く帰って行っただけとか、よくよくそんな事考え付くものだ、自分でもあきれれるほどだったのです。ようするに、三重県の上野原から来たお猿さんに似ていたずら猫だったというだけのことで、ひいき目とは怖いものです。そういえば、7月5日の磯見の長老の葬儀を手伝っていらした方が、グーニーを火葬した日に火葬場までの行き帰り同行し下さった方でした。あの雨の日の火葬場での私達の嘆きを覚えていて、「その後、どうなってますか？」なんて、心配そうに声をかけてくれました。さて、そんな風にお店の中の間人達が右往左往している頃、グーニーに先立たれ、一人取り残された愛妻スィーピーは、寂しくボツンと暮らしていました。グーニーが死んだ事はわかるのでしょうか。グーニーの仏壇？の前までいって、そのお水を飲んでいました。もともと恥ずかしがりやで、引っ込み思案の性質の上に、社会的で好戦的なグーニーの陰に隠れて暮らすのに慣れていましたから、今では、殻を剥がされたでんでん虫のように、隠れ場所がなくて弱りきっているのです。



いったい、スィーピーちゃんの運命は如何に....? —————to be continued



JAZZ

exhibition

← アート・ブレイキー (1919年 - 1990年) は、アメリカ合衆国ペンシルベニア州ピッツバーグ出身のジャズドラマー。
音楽監督にベニー・ゴルソンを迎えてオランピア劇場におけるコンサートを行なわれたライヴの実況録音盤。ファンキー・ジャズの名曲レパートリーが次々飛び出す痛快な1枚。
1961年の初来日以降何度も日本で演奏をおこない親日家としても知られる。彼の演奏した曲の中に“U getsu (雨月)” On The Ginza (オン・ザ・ギンザ) などといった日本をテーマにした曲も存在する。メッセンジャーズにも'70年代以降鈴木良雄、鈴木勲等の日本人がレギュラーまたは客演で加わっているほか、かつての妻の一人も日本人であった。

↓ アントニオ・カルロス・ジョビン (1927年 - 1994年) は、ブラジル音楽を代表する作曲家。ジョビンの音楽的ルーツは、ブラジル近代音楽の父とも言うべきピシンギニャやブラジルの作曲家エイトル・ヴィラ＝ロボスの影響を強く受けた。
1950年代後半、ジョアン・ジルベルト、ヴィニシウス・デ・モライスなどとともに、ボサノヴァという音楽ジャンルを創生したと言われている。
Stone Flower (1970年) - CTI
“Tide”と同時録音された作品。“Tide”がそれまでのイージーリスニング的サウンドを継承しているのに対し、“Stone.”は土着的リズムの採用など、ジョビンの進む方向の変化を示すアルバム。

Milk Hall

working

ミルクホールの珈琲に欠かせないものは、空気のように流れるJAZZの音楽でしょう。ミルクホールの朝は珈琲の香りと、JAZZのレコードで、スイッチが入るのです。終わるのも同じ、レコードの音が消えるとミルクホールの時間も終わります。そして、営業時間中カウンターには、JAZZのレコードジャケットが飾られます。JAZZのLPジャケットの逸品の数々は、JAZZ音楽とともに、20世紀が後世に残した芸術品です。

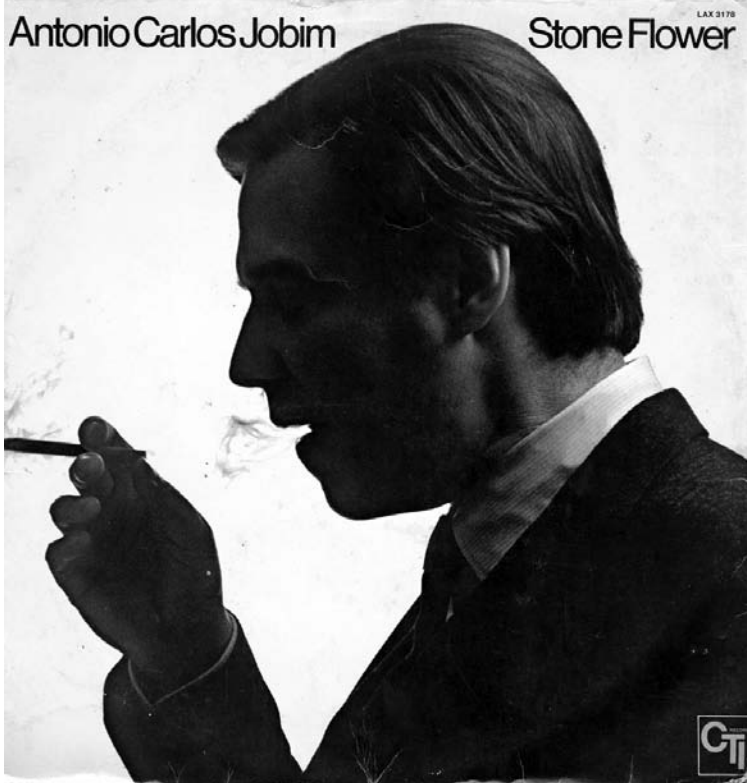
音楽が、貴重品であった時代。一枚のレコードを擦り切れるまで大切に聞いた時代の音楽に、それを包むレコードジャケットにも豊かな愛情と情熱を注いだ結実と言えるでしょう。JAZZのレコードジャケットはどれも、美しく、前衛的でもあり、デザイン性もすぐれています。デザイナー達は、30センチ角の紙の中に、音楽の無限の可能性を表現しているようです。

ミルクホールには、マスターが1960年代から集め続けたJAZZのレコードコレクションがあります。今回のミルクホール工事による移転のため、レコードコレクションは、仮事務所に移しました。そこで、スタッフによりミルクホールのレコードコレクションの整理を行っています。そして597枚のJAZZレコードのジャケットのデータと、音データの保存作業を進行中です。大変な作業ですが、形あるものはいつかは、破損し、消耗し、無くなって行くものですから、50年、100年後、ミルクホールが今と変わらずあるために、せめてデータとして残して行きたいと考えています。

information

ミルクホールより お詫び

ミルクホールタイムス7月号(6月25日発行)は、休刊させて頂きました。8月号より、休業中も変わらず発行致します。大変申し訳ありませんでした。
ミルクホールタイムス編集部より



Milk Hall News 2010



2010年 12月初旬 再生ミルクホールへ

今年7月4日PM6:00にて、ミルクホールは休業致しました。
ミルクホールは37年間の営業を閉じましたが、現在ミルクホールは、もう一度再開する為の改築工事中です。地元斉藤建設の建築スタッフとミルクホールの現スタッフが協力し、また長年ミルクホールを支えた旧スタッフ達が駆けつけ、初めて店を作った1972年に還り、斉藤建設が築くしっかりと土台の上に、37年前にそうしたように、柱を建て、壁を塗り、一度外した窓やドア、カウンターを組み上げ、壊れた部分を一つ一つ手直して、ミルクホールをもう一度再現致します。

そしてミルクホールをこの先、子や孫の代まで、50年、100年と繋いで行くのが、私達の願いです。

12月初旬には、いつまでも変わらずここにあるミルクホールが戻ってきます。その日まで、今しばらくお待ち下さい。

ミルクホール マスター & スタッフ一同

Information

ミルクホール屋台 (仮店舗) 9月初旬 OPEN!

ミルクホール再生工事の基礎工事が一段落した頃、ミルクホール敷地内にて、ミルクホール屋台をオープンする計画です。

工事の様子を伺いながらという事になりますが、8月終わりごろから、私達で小さな屋台を建築します。

メニューは、ミルクホールのブレンド珈琲、アイスコーヒー、生ビールに、軽食、またミルクホールでは出来ないおつまみメニューも計画しています。

詳しい予定は9月にお知らせします。お問い合わせは電話で。

ミルクホール ☎ 0467-22-1179

HISTORY

KAMAKURA
場所の記憶 No.47

ミルクホールのルーツ No.32 スタッフたち

2010年 7月4日 6:00 PM

さよなら ミルクホール

さよなら ミルクホールと、題したミルクホール閉店記念パーティが、催されました。ミルクホールでは、5月16日のアンティークショップの閉店から、ずっと、7月4日の準備のためにスタッフ達によって毎日毎日片付け作業が続けられていました。その頃から、どこからともなく、「ミルクホール閉店・全面改築工事」の噂を聞いた知人や、OBスタッフたちが、今のミルクホールで最後に食事をしようとか、珈琲を飲みたいと、訪ねて来てくれることが増えてきていました。それには、膨大な雑用を抱えた私達も随分と、懐かしく、また励まされました。また、海外に渡っている人達も、FACEBOOKで知ったとか、ホームページで知ったとか、あちこちから、パーティに参加できず残念ですという、連絡が入ってきました。そんなこんなで、お店が無くなる寂しさを味わう暇もなく、時が過ぎていったのです。そしていよいよ7月4日を迎えることになったのですが、いったいパーティは何をしたらよいか全く決まっていませんでした。マスターは、何も用意しなくていい、6時になったら現スタッフもカウンターを出て楽しもうじゃないか、と言い、スタッフ達は、それでは来てくれたお客さんたちに申し訳ない、と言う。じゃ、何か準備をしようにも、大体何人くらいくるのか誰も想像がつかないのです。結局、出たところ勝負というほかなかったのです。6時の閉店までは、通常の日曜と変わりなかったのですが、6時になると同時に、どっとな人があふれたという話でした。なにしろその時間私はマスターの代理でお通夜の席にいましたから、どうやって始まったのかわからなかったのです。私がお通夜を終えて、ようやく戻って来たときには、表のベンチにも人があふれ、彼らは、路地での立食を楽しんでいるようでした。ともかく、私は喪服を脱ぎ、着替えてパーティへと急ぎました。次号へ続く

